

「権利としての住まい」

この研究会が3回済みまして、今まで皆さんの話を伺って、非常に具体的な側面とか、住まいそのもの、人口の問題とか、いろいろな側面からアプローチなされまして、私も勉強になってどうも有難うございました。

今日は非常に視点を変えまして、今まで皆さんがお話しいただいて、それから討論なされた具体的なレベルというよりも、ある意味で原理といいますか、背後にある住まいそのものの原理を少し考えてみたいというように考えております。それで何故かという、原理がきちんとつかまると、それは具体的な側面でいろいろものが進むときの、謂わばチェック・ポイントになるわけです。現象面からだけ入っていきますと、チェック・ポイントが往々にして欠けて、望ましくいかないケースがあるということで、私の場合はこういうことが一番分かりやすいのでこの側面からアプローチをしてみたいと思います。

それで住まいというのは、実際には権利の一つの形態だということで、これがお伝え出来れば幸いですと思います。このお知らせには「権利としての住まい方」と方が付いていたんですけども、これは全然違う問題提起になります。その話も何れ皆さんとお話し出来たら幸いと思いますが。住まいというもの、ラテン語で書いてあります Habita???, これが権利としてこれを見た場合どうなるかということ、住まい、マルチ・ハビテーションを考えてみたいと思います。それで今までも何回かお話しがでていましたが、結果としてマルチ・ハビテーションをやってるんだと、こういう話題が何回かできました。ただ具体的な形でいうと、望ましい状態としてそれを自ら望んで行っているのでは必ずしもない。その意味でパッシブ・マルチ・ハビテーションというような考えを持っていたのですが、これがパッシブ・マルチ・ハビテーションというものが実際に現時点でいろんな問題を含んでいるわけですが、その問題がある時点、いろんな将来がありますけれども、ある時点毎にこれを吸収していくような上位構造として、謂わば理想的なハビテーションを、抽象的といわれるかもしれないけれども、上位構造からのアプローチをしてみたいということです。

それで今日の話の中で、一つ目が理想的なハビテーションを考えてみよう、もう一つは何故権利なのかということを考えてみようということです。その時に一応キーコンセプトというものを設定しまして、ここに並んでいるようなものを考えながら全体を進めていこうということです。全体は3つにわかれています、1が原理、2が機能、3が様態ということで、この3つのテーマで考えてみたいと思うのですが。1を考えると、それは住まいの原理を考えると住まいの視点から、それから機能を考えると、それは住まいからマルチ・ハビテーションへの移行の視点になる。それから機能の様態を考えると、それはマルチ・ハビテーションの視点になる、ということでこういう順番で考えてみたいと思います。

I. 原理 (住まいの視点)

先ず原理として住まいの視点から見ますと、この住まいというのは一体何なのかということで、一つは生得の権利の実現のための支援、補障環境、Incubator という形で住まいを考えてみたいということです。生得の権利の実現というのは、何で権利を問題にするかという時に、やはり生得である、権利自体がその人自身に発生している、そういう状態から考えるのが最もいい。それから補障環境というのは、権利の実現の条件が侵されている場合、支障がある場合にそれは補障されなければいけないという考えなんです。その Compensatory なエンヴァイロメントというものを考える。それからもともと能力が低い、

例えば子供や赤ん坊のような場合には、これはやはり孵化器といいますか、Incubatorの中に入れて育てる。そのような意味での権利を考えて見よう。

それから次の回復性と権利の対価ということで、回復性というあまり使われない言葉をここで使っているわけですが、それがどんなことかということを考えて見ようというわけです。

権利というのは、古典的な定義とここに書いてありますが、18世紀の終り頃に権利宣言というのがいくつか出されました。これはアメリカの独立宣言の時もそうですし、フランス革命の中でも権利宣言というのがあります、それ以後実際これにならってたくさんの権利宣言というものが出されました。その中で一般に言われているのが、ここに書いてあるような「他を害さないで自分の望んでいる全てを成しうること」が権利であるということなんです。これは確かに必要なことを言いえていると思うのです。他を害するということは、それが逆になった場合は自分が害される可能性があるということで、それは権利の障害になる。その意味で「他を害さないで全てを成しうること」が非常に重要な権利宣言の??になっております。

ただ「他を害さないで全てを成しうること」というのは非常に曖昧な言い方のものですから、それを現代的に考えてみると「DNAの記述する状況を支障なく実現出来ること」と言い換えたわけです。何で権利がDNAに関係あるかといいますと、DNAというのは個々の存在を記述しているものです。これが、受精卵が一個出来た途端に全く新しい遺伝子の組み合わせが出来上がる。その遺伝子はその人の個に固有の独特のものである。それで受精は偶然ですけども、出来上がった時に一個の新しい遺伝子の組み合わせが、この地球ないし宇宙の社会の中にきちんと宣言されてほうり出されたということで、このDNAが約束したものは実現されなければならない、というのが権利の原点にあるというように考えるわけです。

そこで先程の Compensatory なエンヴァイロメント、補障環境というものが非常に重要な問題になってくるわけです。それで Compensatory なということとはどんなことかという、これはフランスのバリにあります世界センター、Centre Mondial? という。それでこういうコンピュータを置きまして、コンピュータによっていろいろな人の行動の、謂わばエンハンスということ??。この世界センターでは、???, ヒューマン・リソースという言葉を使っていますが、ここには2つ意味があって、一つは人間の能力、もう一つは人間の中にある資源ということです。これをきちんと開発して、障害のある??されなければならない方向にある人が、その資源を利用し、且つそれ??社会に貢献することが可能になるようにしようという非常に高邁な理想をあげて??。それで???ののですが、この方は両腕が???, 何らかの障害で???. 普通、こういうふうな状態、両腕がこうなりますと、生産的な形で社会に貢献するという事は非常に難しくなるわけです。それで??寧ろお世話をしてもらって、厄介ものになっていくというケースが多いわけですが、ここで考えているのはこの方の能力とリソースをもっと十全にいかす???. ここに気を付けて戴きたいのですが、ここに棒が結び付けてあります。この棒がないとこの人は何者でもないわけですが、この棒が一本あるだけでコンピュータのキーボードを押すことが出来るわけです。そうするとワードプロセッサを打つことが出来るし、それから非常に高度な、この人が数学的にも優秀な人だった場合、非常に高度なプログラムを組むことも出来るようになる。これが一般の状態ではここまでしか腕がない、それをやる事が出来ないわけです。それで棒一本のおかげでこの人は社会に貢献することが出来るし、社会はこの人から非常に多くのものを受けることが出来る。これが Compensatory 補障、障害を補うという意味のことですが、その補障的な一つの思想、それがこの世界センターでは非常に重要視されて、またよく実現されているわけです。

これも???, これはMITのパートと???LOGOというプログラムを皆で???, こういうような環境で皆が???, 非常に生産的な??、非常に生産的な仕事に???ということで、ハビテーションの住まいというものの原点にあるものは、このような形でのあらゆる形での障害に対する補障機能を持っている、これが一つの根本的な条件に???.

1. 生存の媒質としての住まい

生存に必要な条件を備えた環境、この人と言えば、この人があらゆる意味で社会に貢献することが出来るような、そしてこの人自身がいきることが出来るような環境を???。住まいというもの、自分の居る場所、生きて尚且つ居る場所という意味で???機能を持たなければ???。

ここら辺りからラテン語を非常にたくさん書いてあります。ラテン語でいう???,これは全部 *Habitaculum* とか、*Habitation* に関わりのあるところだけを拾って行って、非常に面白い???,それを綴っていったわけですけれども、この *Habitat* というのは環境??、つまりその人が存在することが出来る環境である。そのものが存在するに、生存に必要な条件を備えた環境で、住まいがまず最も根源的な??。

それからその媒質というのは一体何かというと、媒質というのはポテンシャルのある空間、謂わば潜在的機能を持った空間です。そこに関わりを持つとそこからいろいろなものが出てくる。そこに関わることによって、その人の能力が非常に強くエンハンスされていく。そのような意味でのポテンシャルのある空間。その意味で *Habi*??? を与える。*Habilita*??? 実現???.これは更に住まいのようなところ、???,個が存在する空間の中には、このように自分が開発した能力を備蓄して、蓄積していくという機能も???

それで次の回復性を備えたシステムとしての住まいということですが、この回復性というのは???,存在しているだけで既に他を害しているのだという???,思っているわけです。権利宣言にある「他を害さないで全てを成しうる」というのは、実際には不可能なんです。ともかく存在しているだけで、全ての???,を害を与えているわけですから、その意味で自分も疲弊させている環境そのものに対する回復性を持つことは義務である。その意味で権利というのは、回復性を前提にしているということが言えます。これを別の言葉で言うと、権利と義務という、これは昔から使われていたんですが、義務というのは権利に対応した対価、一対一で対応した対価というような考えですが、ここでは権利を行使すると必ず空間が疲弊する、その意味での回復性を前提にしなければいけないということです。その意味で回復性を???,たシステムとしての住まいというものを考えていくことが非常に重要である。そうするとその次にある、権利、対価、社会的???,というものを、住まいそのものの特性としてとらえていかなければならない。これが重要な問題だと思います。

回復性の評価の基準というのは、一般に損害が起こる、例えば山火事が起こって何億円の損害が起こったという言い方をします。その場合の計算というのは、仮にその木を売った場合に、そこで本当ならいくら儲かっているはずなのにそれが無くなってしまった、その時点での経済価値が評価の基準になるわけですが、ここで考えなければいけないのは森が火事で焼けてしまった場合には、それを焼ける前の現状に復するために、回復するために非常に多くの負担がかかる。その負担において無くなったものの価値を評定しなければいけないという考えなんです。これは環境問題について一番重要な視点であるというように思います。要するに環境が、あるものを壊して、評価額として幾らのものを壊した、その場合その評価額を弁償すればその弁償が済んでいるというように一般に考えているけれども、実はそうではなくて、壊して無くしたものを現状に回復するためにかかる費用、これはそのものを売る費用より遥かに高い金が???.それで現状では、環境というものは非常に回復しにくい状態にあるわけですが、そういう意味での回復の評価の基準、失われたものの価値を負担の大きさによって考えるということになります。

このような大きな負担を強いられているというのが人間の生存であり、人間の???,としての住まいの属性なのです。その場合、回復性をどのように考えるかということ、回復性を高めるためには保存性というものが高くなればいけない。保存性を高めていき、これが一般の家庭から人間の周辺の空間、いろいろなハイラルキーがあるわけですが、その中でそれぞれの保存性を考えていくことが必要だと思います。

この回復性を考えるときに、これは昨年???アース・デー??、これはマジソン・アヴェニュー?????。これは日本の場合は狭い道が多いから小さく?????。????。ただこれがアース・デーだけではなくて、???ニューアークの???黒人ばかりです。ニューアークの街でよく黒人の暴動が起こっているのですが、???黒人しか住んでいない。ニューアークの駅のところにマクドナルドがあって、それでその???ゴミ捨てが2つ置いてありまして、絵が書いてあります。こういう形をしたものはこちらに入れて下さい、こういう形のはこちらに入れて下さいという具合で、それくらいの説明は分かります。

日本の場合は燃えないゴミ、燃えるゴミというような分別をしているわけですがけれども、何が本当に燃えないのか、これは革製品ですから燃えるのか燃えないのかという評価は非常にやりにくいわけです。一般に危ないのは燃えないゴミに入れるわけですがけれども、その入れた後に日本の場合は、ポリエステルの袋も入れて燃えるゴミを出します。あれが実は有毒ガスを出す一つの元凶です。それで非常に矛盾したことを???。分別回収というものは、概念としてはわかっていながら実行するときに非常に難しい???。

それがニューアークのマクドナルドの場合、絵から同じ格好をしたものはこっちに入ればいいということで、フル・プルーフ、バカでも使える、バカに対する安全性というのが非常に考えられていて、それでこれはその地域の回復性に非常に寄与しているということがいえます。日本の場合は一般に知的水準が高いから、言葉で言えば済むという誤解があるわけですがけれども、これからそのような意味でそんなに高い知能のある人ばかりではない、特にこれは言うてはいけなけれども、いろんな国からいろんな人が、この場合日本語の言えない人や自分の国の言葉を言えない人もいます。その場合には、同じような絵を書いて誰でもバカでも絶対大丈夫な???こんな配慮が回復性には非常に重要です。

この配慮を行なう基本的な概念において、住まいというものを???。それで住まいというのは、一つの権利としてこれを考えてみますと、これはチロル地方ですが、牧場があってこれが農家です。非常に立派で、居住環境としては良いと想像されるような広さもあるような家です。見るからに内容の充実した家に住んでいるのです。東京でこの程度の家を買くと相当の負担になりますけれども、これは牛を飼っているような牧畜農家の普通の当然の家です。80年代の中頃から日本で建てられ始めた、ちょっと洒落た白い壁の家というのは、こういう家を真似して造られているのです。これが洒落た金持ちの家になっているのですけれども、彼らの場合は元々、社会としてこの権利が保証されているのです。

これはセラミックのブロックで出来ていまして、日本は木と紙の家と言いますがけれども、本当に木で作って紙を貼り、その上にモルタルを塗るということをやっているけれども、それとは非常に違う、本格的な建築が至るところに点在している。これは100年や200年は軽くもつ建物です。

そういう意味で回復性と保存性を考えるべき、重要な示唆を???。回復性を高めるための保存性というのは、Habita??(継続していること)、つまりあるものは???であるということ、長くもつということです。これは回復性にとって非常に重要なポイントです。日本の建築の場合、今盛んに新しい家が80年代の後半に造られましたけれども、あれは数十年もつかどうか、50年もつかどうかわからない。ちゃちな華美なものを造っては壊し、造っては壊しということが行われているのです。

これは前にも話した????、フランス政府が出している記録ですが、パリの建築物は15%が100年以下の建物で、つまり85%は100年以上たっているということで、実際いろんな人に尋ねますと、本当に18世紀、19世紀からの石組の建築を毎日使っている。そういういつでも????で形で使われるものと、短い????ものと、どちらが回復性に貢献するか、これは目に見えて明らかです。

更に、このような建築物がもたなければならない機能というもの、これが Closed Environment の中での処理、プラス外部化ということ、これを考えるとハビテーションの設計に大きく貢献するのではないかと思います。

ここに書いてある TUCSON ALOZONA の BIOSPHERE II は一つの実験で、Closed Environment の中だけでもやっていこうというもの。ただこれには若干の危険がありまして、熱エネルギーを太陽から取っているから決して Closed ではない。それから建物自身が赤外線熱を外に出すから、これもやはり決して Closed ではない。熱エネルギーに関しては Closed ではないけれども、物質的には Closed しているということで、この中での回復性を前提とした環境の実験です。これは重要なテーマだと思いますので、長谷川さんからお話しを伺いたと思います。

日本では、鬼は外ということで、悪いものは全部外に出してしまうわけですが、鬼はうちでばらせという、これをやろうというわけです。貧乏神や鬼が来たら、戸を閉めて出さないのです。捕まえてばらしてしまうんです。カリシウムがとれたり、蛋白質がとれたり、いろんなものがとれるわけです。そういう意味で、内側でばらしてしまう、それで再利用の可能な状態にしてしまう、これが TUCSON ALOZONA のアイデアと通ずるものではないかと思うのです。

これは70年代の始めからずっと言われ続けて来たことで、いまだに端緒となる解答が出ていないのです。TUCSON ALOZONA の場合も、まず実験が始まったということで、解答は出ていないのです。解答を得るための視点、それは猿から少なくとも犬へということです。猿は木の上に住んでいるんです。食べるものは全部木になっている果物などを取って食べるわけです。無くなると他所へ行って食べるわけです。いつでも木の上に住んでいて、木の上から排泄するわけです。排泄したものはどこへ行くかという、遥か下の地面に落ちますから、猿の環境は決して汚染しないわけです。これは鬼は外型なのです。

これをやっているのが実は日本である。昔から日本で、垂れ流しでやっていて、今でも琵琶湖に生活污水が入っていく、これはまさに垂れ流しです。日本で廃棄物が処理出来ない工場、これは東南アジアにどんどん出していく、規制の緩やかなところに出していく。東南アジアが駄目になったら今度はインド、それからアフリカの方にどんどん出していこう、これはまさに猿型の環境意識です。

少なくとも犬へというのは、どういうことかと言うと、出して後ろを見て足でパッパッと砂をかけます。少なくともかける意志はあるわけで、かければバクテリアが分解して地面に還元されるから、その意味で???があるわけです。その意味でせめて犬の意識を持つとうということなのです。

亀というのは、亀の技術を見習いなさい、これは亀が産卵をする時、後足できれいに穴を掘って、卵をたくさん生んで、後できれいに砂をかけてならして行くのです。人が見てわからないようにならして行くわけです。

もし犬が亀の技術を持っていたら、これは大変結構なことになるわけで、我々が見習わなければいけないのは、亀の技術を犬が行うということで、我々の社会はそうでなければならぬという意味です。

ハビテーションというのは、一戸の家屋を考えるとすべきではなくて、実は社会メディアを考慮することである。ハビテーションというのは、社会メディア自身にアプローチすることであると考えられる。

そして住まいとは一体何かと言うと、広範な社会メディアというのがあるわけですが、それが個とか、各社会的機能レイア、これは個人とか、家庭とか、Family とか、それから部分社会、全体社会と、いろんなレイアがあるわけですが、それに対応した形で持っているところの接触機能なのである。ハビテーションの Home から人は色々なものを得る、それから Home に対して色々なものを貢献する、そういう接触機能です。人と Home との間の接触機能、人と社会メディアとの間の接触機能、これを住まいというのは実は持っている。こういう視点から住まいを考えてみようと思っている。

今まで言っていることは、色々違う言葉で言っているけれども、全部同じ内容のことを言っているわけです。

2. 権利の実現度

権利の実現度の一つのアспектとして、リソースの専有度がある。

専有度というのは、時間的専有度、空間的専有度、それと内容における専有度というのがある。時間的な専有度というのは、いつでも自分が専有出来ているということです。空間的にというのは、どこでも自分が専有出来るということです。内容は、どんな内容においても専有出来るということです。

この専有度がどの位高いかということが、実は権利が実現されている度合いになるのである。これが Home の中でどの位実現されているかということが、社会の中でどの位実現されているかということが、その人と我々社会に住んでいる人々の権利になると考えられる。これが権利の実現度のアспектということです。

それでこのアспектを考える時に、「中間集合」という非常に重要な社会的ファクターがある。

ごく簡単に言いますと、1960年代に経済爆発がありまして、池田内閣総理大臣が10年間で給料を2倍にしてあげますと言ったわけですが、結果として2倍にならなかった。どうなったかと言うと3.4倍になってしまったので、公約は外れたけれども、いい状態に、権利としての収入、インカムは非常に、思いがけなく増えたということがあった。その60年代の経済爆発の中で、経済階層に新たに組み入れられることの出来た人々、それが「中間集合」です。

今まで社会的に効果のある経済階層というのは、アッパーミドルまで、上位の中産階級までが経済に影響を持っていた人々であったわけです。戦前の日本の社会も、イギリス、ヨーロッパ、先進国の社会はそうのように出来ていました。アッパーミドルは、統計をとりますと90何%の人が中流だと言っているのですが、そんなに生易しいものではなく、経済人口の5%より下位です。それでどんな属性を持っているかと言うと、別荘の一つや二つは当たり前、車は2、3台は当たり前、それからそうゆうすべての資産価値の十分の一の年収がある。そういう人達がアッパーミドルであるという一応の定義があるが、日本の場合は土地が高すぎますので、これはあてはまらないのですが。例えば、100坪位の家を持っていれば何億円になります。これを十分の一で割っても何千万。それだけの収入のある人はそんなにはいないわけですから、日本ではこれはあてはまらないわけですが、一応そうゆう基準として「中間集合」を考える。

この「中間集合」というのは、人数でいうと、アッパーミドルが5%であったのに対して、ほぼ経済人口の30%を占める非常に膨大な量です。これが新たに社会的な経済の影響を持って社会に参入してきたわけです。この人達が???を所有するということ、???を所有したいと強く願うこと、これを行うとリソース難がすぐに起こってしまいうわけです。

ラテン語で挙げてあるのは頭に Hab という言葉がついています、ハビテーションのハビです。Habit までだいたいあります。ラテン語の語源は Habeo? という言語で、これは英語の Have です。Habeo がある側面を持つと Habit になるわけです。Habit をずっと並べてみると????。

「中間集合」が Habito??? を望みますとリソース難が起こる。リソース難が起こる原因は、権利基準が上昇する、これは毎年10数%ずつ収入が上がっていくということは、端的に何を意味するかというと、新しくものを買うことが出来る、新しく買うことの出来るものの範囲が広がるということです。それはとりもなおさず権利の拡張です。今までは持つことの出来なかったものを、持つことが出来る、これは権利そのものです。ですから60年代の経済爆発は何かと言うと、この人達の権利を拡張し、確定したということです。

エフェクターが中産階級から中間集合に移った時に、青方変位という言葉で表現されるような変質をとげたわけです。青方変位と言うのは、宇宙物理学で使う言葉なんですが、相対的に情報変質をするという意味で使っています。60年代はほとんど物価が上がらな

った時代ですけれども、それに対して毎年10数%の賃金がアップしている。その結果、権利が確定している。これが青方変位です。「中間集合」の質がどんどん上昇していくということです。

ところがこの「中間集合」が????を望むと、リソース難が起こって、「中間集合」は????、アッパーミドルのようにリソースを持つことが出来ないということがすぐにわかってしまう。それで「中間集合」が、アッパーミドル以上の暮らしと同じリソースを要求する、例えば別荘が一万坪程度、都市の中に300坪以上の住居を持つということ、この人達が全部望んだら、東京がたちまちパンクするし、日本のように15%しか可住面積のない場所ではそれは出来ないわけです。

質的なアッパーミドルの生活に対する「中間集合」の活動、これは目の前にありながら手に入らなかったもので、その一つの象徴的なものが「ピアノ殺人事件」であったわけです。

それでピアノとか自動車というものを作るメーカーがありますけれども、自動車を作った場合、例えばブルーバードとかコロナというような中級の下位の車、これを作りまして、それを「中間集合」向けに売った。そしてある種の騙しを行った。つまり、あなたは車を買うことが出来るようになった、つまりあなたは中産階級だ。中産階級に車を売っているのだというごまかしをやって、くすぐりをやって、その結果次から次へと車を買うようになった。隣が買った、そうすると家でも買わなければならない、更にその隣も買った。それが更に少しずつ大きな車を買っていき、そういうような状況が起こったわけです。

ピアノもやはり中産階級の一つの象徴的な家具ですが、それが楽器会社が増産をしまして売り出したわけです。ところがこの当時から、今でもそうですが「中間集合」が住居として持っている空間、これはだいたい団地サイズの2DKとかそういうところです。団地の棟の中に何十戸と入っている、ああいう所に「中間集合」は皆住んでいるわけです。そこでピアノをならしたらどういうことになるか。

ピアノが可能だった時期、これはピアノが17、8世紀の末にチェンバロというものから新しく発生したわけなんです、その時にクラビコルドフォルテピアノという名前が付いた。フォルテは強く、ピアノは弱く、ですから強弱自在の鍵盤楽器という名前で、最後のピアノだけが残って、今のピアノの名前になった。これがその改良の結果、非常に大きな音を出せるようになった。その時からコンサート・ホールというのが、だいたい数千人入れる大きなコンサート・ホールがヨーロッパで作られるようになった。何千人という人を、たった一台のピアノで、皆を感動させるような音楽を作った。それがベートーヴェンとかです。

そのためのピアノ、ようするにあの大きな空間を???されるためのピアノを、2DKなんかでならされて堪るものではない。それが昔可能だったのは、アッパーミドルとか貴族というのは、非常に広い敷地の中に館があり、その家の前を仮に通っても、どんなピアノをがんがん弾いても、微かに聞こえてきて、ああ文化の香がするなという状態で誰の邪魔にもならなかった。そのピアノを団地でやられたら殺人事件が起こるのは当たり前なんです。その意味で、リソース難がこういう形態で起こってしまっている。

このリソース難というのは、日本で起こることは必ず地球全体で起こる、特に低開発国にこれから順次どんどん起こってきます。それで回復性のない状態で産業の開発をしたついでに、東南アジア、第三世界、第四世界がどんどん産業国家になっていった時に、地球はどれほどすごい汚染を受けるだろう。我々は、中国が工業社会になった時、どれほど酸性雨をこうむらなければならないか、灰塵をこうむらなければならないか、目に見えているわけです。

これを、今あらかじめ吸収するシステムを考えて、これを世界に宣伝しなければいけない。日本は先進国と後進国の間に入った中進国という立場で、先進国の悪、後進国の悪というものを見ることの出来る立場にいるから、これからの住まいにおいてこれを提言することは、地球社会に非常に有効なことであると考えられる。

新しいシステムの必要というのは、例えば Cote d'azur というのは、ニースとかカンヌで、あまり高くない瀟洒ないいホテルがずっと並んでいます。非常に広い道幅があって、美しい海岸があって、それほど多くないテントがある。そこにそれほど多くない人が行っていた、戦前と戦後の最初の頃は、静かな閑静な所だった。

ところが、そういう所へ「中間集合」の人達がどっと押し寄せるようになりました。それが丁度私がパリにた1957、8、9年の頃で、バカンスというものが合言葉のようになりまして、一斉に南の方へ、パリ、北の街の人達が旅行するようになった。その意味で Cote d'azur があつという間に汚染をされかかったわけです。Cote d'azur のすぐ傍にキャンプをはって、それからこれも私のいる頃からはやり始めたものですが、キャンピング・カーを乗って行ってキャンプをする。そういうことで環境汚染がどんどん進んでいく状態が起こった。

それでアッパーミドルや上流階級からこれが阻害されるということになり、これを行政的に国がある解決策を見なければいけないとして、国家行事として行ったのが Languedoc の開発だったわけです。Languedoc はマルセイユのこちら側にある所ですが、元は沼地だらけでろくでもない所だったけれども、非常にきれいな開発を行った。それで特にあその特徴は、ピラミッドと呼ばれる高層建築を建てまして、非常にたくさんの人を狭い所に吸収できるようにした。その結果、これが明らかに行政が「中間集合」を認知した、一つのポリシーであるということが理解された。そのような意味で道路行政も行った。自動車行政も行った。パリ周辺の住宅地の開発も行った。

そういう意味で「中間集合」の新しい青方変位に対応することを、少なくともフランスの政府は行ったと言えるわけです。

それで、このシステム間の移行というのは何かというと、ゴルフ、テニスのような、これはアッパーミドルがもっていたもので、これは貴族からアッパーミドルが受け継いだものですが、乗馬とか、いろんなものを。乗馬というのは、貴族が狩をやっていた、それが乗馬クラブに変わったとか、いろいろな形でアッパーミドルにわたった時にだいたい矮小化しているわけです。それが「中間集合」にわたった時に、更に矮小化するわけです。その内容が、ボーリング、ディズニーランド、マクドナルドとか、嘘くさい自然の流行りのリゾートです。そういうものを買わされて、「中間集合」は騙されて一応満足しているという状態になるわけです。

ここでその差、Cote d'azur と Languedoc の差、ゴルフとボーリングの差というものを比べてみると、Cote d'azur は広いところに非常に少ない人がいる。リソースの専有度が非常に高い。それをゴルフとボーリングを比べると、ゴルフの場合は一コースが必ず4人程度の人が非常に長い時間使ってもいいように出来ています。非常に広い場所を少ない人数で専有することが出来る。それに対してボーリングというのは、狭い所で数人でやって、時間が来て、はい終わりということになる。非常に回転率の良い、リソースの専有度からいうと非常に低い状態が考えられている。ディズニーランドもマクドナルドもすべてがそうです。「中間集合」のためのシステムというのはこういう特性をもっているわけです。

それがあまり格調の高くない状態で行われているので、誰もこれを喜ばないわけですが、これを少なくとも Languedoc 程度に、それなりに非常に快適な環境として作っていったらば、「中間集合」は必ずしもアッパーミドルのような形を望まないでも済むようになるだろう。もしこれが日本で成功すれば、日本の後をおっかけてくるたくさんの国々の一つの見本になるだろう。そういう意味で新しいシステムの適宜、これが必要になってくる。これはまさに、この技術というのは、家庭 Home の中で、すべての人が権利を主張しながら生きていくことが出来るための基本技術になっていくものだ考えている。

3. メディアの存立の条件と維持技術、及びその対価の性質

メディアが存立するためには条件がある。それは何かというと、「ソドムとゴモラの破

壊の条件」という、これは旧約聖書の創世紀に書いてあることです。

アブラハムという人の所へ神の使いがやってきて、「ソドムとゴモラの街は悪徳に満ちているので、あの街を滅ぼしに行くのだ」と言いに来た。その街にはアブラハムの弟のロトの家族が住んでいるから、その人には害を与えないようにアブラハムが懇願するわけです。その時にアブラハムが、ソドムとゴモラの街に、もし50人の心の正しい人がいたらば、あなたはその街を滅ぼすだろうかと質問した。そうしたら、50人いたらその50人のためにソドムとゴモラを滅ぼすことはないと言った。それでは45人だったらどうなんだと聞いたら、45人だったら滅ぼさないと言った。それでは40人だったらどうだ、30人だったら、20人、10人と言ったら、10人のためにも滅ぼさないと行ってすつと行ってしまった。

それで結果としてどうなったかと言うと、その神の使いはロトの家にまっすぐに行った。それでロトの家族に「これからこの街を滅ぼすから急いで街を出なさい」と言った。その時にロトの家族は4人いた。ですから10人いたら滅ぼさないといいけれども、4人だったらもう我慢できない、というスレッシュホールドがあるわけです。メディアの成立というのには、必ずスレッシュホールドがあるわけです。ただ4人でも正しい人を殺してしまうのはいけないから、外に出なさいというので山の方に逃がしたわけです。

その時に神の使いが言ったのは、「絶対に後ろを振り向いてはいけないよ」。4人で逃げた行っただけけれども、ロトの奥さんは後ろを振り向いてしまった。それで塩の柱になってしまった。これはユダヤの神の悪意だと私は考えるのですが、ロトの奥さんというのソドムの生まれの人なのです。ロトは外からアブラハムと一緒にやって来た人です。だからユダヤの神の救いたい直系の人というのは、ロトとロトの娘達で、全くのあかの他人である奥さんは振り向かせて焼いてしまった。そうすると3人のために神の使いは、一つの苦勞をした。

そうするとスレッシュホールドを越える方法が一つある。それは人を出してしまうことであつたわけです。

次の銭湯というメディアは、昔は非常に利用者が多かったけれども、今どんどん減って、一軒の銭湯が成り立つだけの人数が地域社会にいないわけです。そうするとお風呂屋さんとしては成り立たないので、入湯料を上げるか補助金をもらわなければいけないということで、今は補助金が出るわけです。国が税金でもってこのメディアを保つために、何人までだったらそのメディアを保つ必要があるか、国がそれに税金を払う必要があるか、これにもやはりスレッシュホールドがあるわけで、たった一人のお爺さんが「俺は銭湯の熱い湯が好きだ。だから風呂は必ずやってくれ。」と言ってもダメなんです。そういう意味のスレッシュホールド、メディアの成立にはスレッシュホールドがある。

オーケストラもそうです。オーケストラの場合には「日フィル事件」というのが起こりまして。フジテレビが日フィルを最初雇ったわけですがけれども途中で切ってしまったわけです。これもやはり「ソドムとゴモラ」と同じ原理が働いたわけですがけれども、それは何かと言うと、視聴率があまり良くない、それなのに3億円以上の経費がかかってしまう。視聴率で3億円を稼ぐとはどうしても思えない。そうしたらオーケストラはやめてしまう以外にないということで、簡単に切ってしまったわけです。オーケストラというのは数千円の入場料をとります。それで入場料でオーケストラがまかないきれているかと思ったら大間違いで、必ず補助がある。NHKの場合は、NHKからほとんどが出ていて、国からも補助が出ている。それのないところは四苦八苦してやっているわけです。そうすると補助が出るための条件、これはたくさんの方が喜んで聞くことである。それすら無くなってしまったオーケストラには、もはや公的な金を出す必要は全然無いのだ。

ですから銭湯もオーケストラもソドムとゴモラの街も、全く同じメカニズムにおいてメディアの存立の条件を考えなければいけない。

それを Home に考えてみると、Home が持つべき機能というのは、それを利用する人のどこまでの負担でそれをまかないきれるか、それから特に Home が成り立つための社会が持つべきインフラストラクチャーに対して、税金でどこまでカバーするのが正しいかとい

う問題、これを「ソドムとゴモラの条件」から考えてみなければいけないわけです。

それから「ソドムとゴモラ」の問題を宅内、Familyの中で考えてみると、職住接近における個の権利というのがある。職住接近をするというのは、一人の人が2時間もかかって通勤するのは正しくないという一つの考えがあります。そのために職の場所に非常に近い所に住居をもってこようということ？？？けれども、誰か一人の職に近い所に住居をもっていくと、その家族の構成員のある人にとっては職から離れることになってしまう。距離が増えてしまう、そういう問題が必ず起こるわけです。

その結果として起こってくるパッシブなマルチ・ハビテーションを早く何らかの方法で解消する、吸収する技術というものを考えておかないといけない。それでFamilyという構造はこの？？？に対応できるのだろうかという、これは私としては非常に大きな質問なんです。この前、またFamilyというのは復活しているという御指摘があったので、それも確かにそうだと思うのですが、ただ現状のFamilyというのはこういう問題に対応出来るのだろうか、Familyを構成する個の個々の人の権利に対応出来るのだろうかという問題を考えなければいけないことです。

それからそのFamilyが入っているHomeを成立するためのインフラストラクチャー、ソーシャル・メディアというものは一体誰がメンテナンスをするのだろうか。個人の状況ではこれは出来ないわけです。社会メディアにおいてUPP (User Pay Principle ? ?)、ユーザーが払うのは当然だ。ただ別のところから補助金が出なければ、それは実際には成り立たない。例えば下水を個人の負担ですることは出来ない。エネルギー関係の入出力を個人で行うことは出来ない。そのような意味でUPPの実現形態というものは、どこかで社会メディアと関わってくる。それは一体誰がメンテナンスをするかという問題、これが完全に残ってしまっているわけです。それが行われないうちに、例えば琵琶湖の場合には、生活排水がどんどん垂れ流しに入り込んでいっているのを止めることが出来ないわけです。

そのような意味の回復性を含んだ家を考えなければならない。

4. Capacity と社会的技術

Capacity と社会的技術、それが今の問題を吸収するための技術として考えられることなんです。

またアブラハムとロトが出てきます。この創世紀の13章6というのは、アブラハムとロトが別れるシーンなんです。それまでずっと一緒にやってきて、ユダヤのために尽してきたのだけれど、カナンの地に到達する直前にアブラハムとロトが連れてきた牧童たちが喧嘩を始めたわけです。ずっと旅をしているうちに、人数がどんどん増えて、羊も数もどんどん増えていく。そうしてその今住んでいる地域が、牧草とかいろんな環境において、これを保持するに足りない状態になってしまった。そこで自分の羊をよい状態におくためにお互いに喧嘩が起こった。それを見てアブラハムは、ロトに言ったのは「あなたと私はこれから別れて過ごそう」、キャパシティの限界を越えているからとは言わなかったけれども、これが一つの解決策だった。それでロトはソドムとゴモラの街へ行ったわけです。

このような維持技術というものの非常に原始的な形は、かたまっていて駄目だったら、どんどん分けていこうという、これが最初とられたわけです。

またその創世紀にノアの箱舟といのがあります。これはすべての種を保存するために神が命じて作らせたものです。その大きさというのは、300×50×(30+1) キュビトという単位でして、1キュビトというのは不正確なんですけれども、だいたい50~60cm位の大きさで、その大きさの舟を作りなさいと言ったわけです。それに従って作ったわけなんです。普通常識で考えますと、そんな百数十メートル舟幅何十メートルの小さな舟に、地球上のすべての種を収容出来たのかという疑問がすぐ起こるんですが、この場合アブラハムに言ったのは、清い動物は2つがい、清くない動物は1つがいだけ選びなさい。また別な記述があるんですけど、これはすべての動物を1つがいずつ選びなさい、そういう切り捨てを命じたわけです。この切り捨てをすることによって、代表としての動物をノアの箱舟の中に全部収容することが出来たわけです。

ちょっと考えると、象がいたり、カバがいたり、キリンがいたり、あんなものがたくさんいて入るんだろうかというわけですが、もう一度考えるとああいう大動物というのはそんな沢山いないのです。たいした種類ではない。後は中動物、ライオンとか、豹とか、後は小動物、猫とか犬とか、更に小さい虫はほとんど容積をとらない。そのような意味で、このノアの箱舟に種は全部入ったということです。ただ疑問なのは、清くない種を全部減ぼしたり、人間を全部減ぼしたり、魚は全部生き残ったのはどうなるのか、は一応なしにしておいて。

そういう技術、それは何かと言うと、インプロージョンの概念です。要するに、高層建築を建てれば狭いところにたくさんの人が住めるという意味で、3階建てにして、1階は5~6mの高さになりますから、相当大きな動物でもここの中に入ることができるわけです。

ところが日本の徳川政府というのは、これに対してどういうことをやったかと言うと、1693年、これは元禄が終わってどんどん江戸の経済が盛んになってきて、たくさんの人が地方からやってきた。三河屋？とか松坂屋とか、ああいう名前は全部地方の名前なんです。そういう人達がやってきて、三河からきた人はお味噌を作るのが得意だとか、いろいろな形で江戸に住んでしまったわけです。

そうすると江戸の Capacity を越えてしまった。その時に、徳川政府が何をやったかと言うと、まず人別帳というのを作った。人別帳というのは戸籍なんですけれども、戸籍というのはだいたい近代の特徴で、必ず戸籍を作るわけなんです。この場合戸籍を作ったのは何のためかと言うと、人返しのため、江戸に住んでいい人と江戸に住んではいけない人を分けて返した、まさにアブラハムとロトがやったのと同じ方法をとったわけです。

ここで非常に重要なのは、テクノロジーがその当時の社会の発展に追随していない場合には、こういう消極的な方法をとることしか出来ない。テクノロジーが発達してくると、非常に高い密度でこれを吸収することが出来る。

5. SOLUTION

ハビテーションを考える場合に、時空間の重層利用というものをまず考える。空間としては高層建築を作れば重層利用が出来る。時間も重層利用を試みる。これは Implosion という方法、これによって時間の重層利用を考えてみる。それから超時空間的マルチハビテーションを考えてみる。これは後でお話ししていくことです。

もう一つは、Indeterminacy、非決定性において????をやっている。要するに決定性の強い、リジットな構造を作ると、それだけで満杯になってしまう。それを不確定な状況にしておくと、どこかが膨らんだ時に凹むことが出来る。そのような Indeterminacy というものを原則として考えた場合に、これが可能になるだろう。

この二つの視点によって????をやっている。そうすると静かな、高機能空間が出来るわけです。

東京の場合、今は非常に騒がしい街です。ところがヨーロッパの古い街、パリに行っても、ウィーンに行ってもそんなに騒がしくありません。むしろ非常に静かな印象を受ける。それでパリ、ロンドン、ウィーン、ザルツブルグなど、ああいう街を訪ねた日本人で、ヨーロッパは活気がないと誤解する人がいるんですけれども、ニューヨークもそうですが、中央のいくつかのアヴェニューを除くとほとんど人が歩いていない。それで活気がないと言うのですけれども、実はそうではなくて、機能の高い社会、都市ほど静かなたたずまいに住んでいる。

それは能力の高い人のことを考えればよいわけです。要するに何かある問題が起こった時に、能力の高い人は別に大騒ぎしないで、それを簡単に吸収します。それが能力の低い人は、たいした事ではなくて問題が起こっても非常に大騒ぎをしてそれに対処する。日本の活気というのは、実はこれだというふうに私は考えるんです。日本の社会の機能というものを、もっと高めていくことによって、静かで温和で、非常にアッパーミドルの持っている、上流階級の持っている穏やかさに近いもの、これを社会として獲得出来るだろう。これが第一段階です。

II. 機能 (住まいからマルチ・ハビテーションへの視点)

それから第二段階を考えますと、機能ということを考えると、どうしても住まいからマルチハビテーションへくるわけです。その時「皮膚空間」ということと、「エクソスケルトン」を考えてみようということです。

「皮膚空間」というのは皮膚の空間です。皮膚の空間といのは、ふつうの動物、生まれたばかりの赤ん坊でいうと、まさに皮膚のそのものの形をしている。動物の形の輪郭そのものの形をしているけれども、テクノロジーはそれを非常に大きく拡大している。服を着るといのは、それだけ「皮膚空間」が拡大していることです。それから温度調節に対して「皮膚空間」がもっている機能を拡大しているのです。その意味でハビテーションを考えると、やはり家屋というのものも、そういう意味の「皮膚空間」の機能の拡大として考えることが出来る。

それからもう一つ「エクソスケルトン」というのは、外部骨格という外側の骨格です。これは元々、蟹とか海老とか、中に骨がなくて外に骨のあるコウカク類の、外側のあれを「エクソスケルトン」と言うわけです。それを人間に適用して、人間がおよよした柔らかい体で、いつも外側に「エクソスケルトン」を何重にも持つことによって、その個というものの存立が非常にエンハンスされる。それから危険性を非常に高く保護することが出来る。その意味で「エクソスケルトン」というものを考えてみよう。

1. Habito (済む、滞留する) に関わる維持機能の外部化

この場合、「皮膚空間」の外延はどのように成されるかということ、Habito??、これは住むとか滞留するということですが、これに関わる機能を外部化する、Externalization??をする、Homeの機能を外部化するということによって、これが相当吸収出来る。考えられるのは、Homeが持っている本質の中にHabitaclumというものの基本機能と社会機能として外部機能を成立させ、それを発達させていくということ。これが実は人類の歴史の長い思考錯誤の歴史そのものであった、テクノロジーの歴史そのものであったというように考えられます。

そしてその次のHabitudという言葉を考えると、これは性質とか外観、Habitusというのは装うということなんですが、これは機能を身の回りに装う、フランス語でHabiet??、???というの着物ということですが、ラテン語から英語とフランス語に入った言葉は非常にたくさんありますが、この装うというのも全く同じようにして入っています。それで機能を体に纏うということ、これをHomeとして考えてみるということです。

その時に、外部化における機能のReplaceability??というものを考えてみる。要するに何によってある機能を置き換えることが出来るかということなんです。それでReplaceable??なものとは何かというと、外部から人間に対してアプローチして問題解決をすることの出来るタイプのもの、これはサーヴィス型とか???型のようなもの、これがReplaceable??なものです。

例えば、パン屋というの、昔はパンは全部自分の家で焼いたんです。大きなかまどを持っていて、毎朝女中さんが4時頃起きてはパンを焼いて、旦那様、奥様に食べさせていた。その機能がパン屋という形で外部化したわけです。パン屋が成立出来るのは、田舎の5~6軒しかないようなところではパン屋は成立しません。都市の中だからそれが可能であるわけなんです。そのような外部化というものを行っている。それから米炊き屋、これも日本のお米は自分の家で炊くわけですけども、その機能が外部化したものだというふうに考えればいいわけです。それから、といだお米を売っている、普通は自分でといでやるんですけども、この場合は水だけ入れて炊飯器のボタンを押せばいい。

その意味で、家事の中のある部分を外部化したものと考えられる。このような意味で、パックされた魚、骨のなくなっている魚、いろいろな意味の便利屋、ファストフード、貸しおむつ、紙おむつというようなもの、これは全部、家庭がそれまで持っていなければならなかった内部機能を外部化したものです。これだけ例を挙げますと、皆さんいろいろ思

い当たられることがたくさんあると思われるので。これを機能の外部化ということで Home に結び付けながら考えていただくといいと思います。

次に置き換えの不可能なもの、最たるものは情報なんです。といのは、パン屋で買うパンというのは自分の家で焼くパンとは違うものです。味も、焼き方も、好みも違う、一律に焼いたものを似ているものとして取り入れる。だから全く違うものなのです。置き換えることは可能だけれども、違うものを使っている。紙おむつなんかもおむつではない。日本でいうと、浴衣をばらして作ったおむつとは違うけれども、代替性がある。情報というものは違う。

情報の場合は、似ているものでは絶対駄目なんです。その情報でなければ駄目なので、Replace が絶対にきかないものなのです。そういう意味で、皆さんは自分の電話帳をこのへんに必ず持っています。それから自分のある種の情報をためこんだもの、システム手帳のようなものは、個々が持っていて外観は似ているけれども、人のシステム手帳を使うということは不可能なことです。こういうものは絶対 Replace 出来ないものです。それが情報なんです。

職業も今は Replace が出来ないと考えられている。それから教育環境も出来ないと思っている。単身赴任が行われるのは、せっかく子供をいい学校に入れたのに、亭主のところにくっついて行ってしまうと、ろくでもない学校に行くことになるから、そのために家族は残るといったパターンがあるわけですが、その意味で教育環境は Replaceable?? ではない。ただ本質的には、これは可能なんです。どこの学校に行っても必ず同じものが受け取ることが出来るような社会システム、それからどこへ行っても自分の能力に対応した職業によって、その場所に働くことが出来る、インカムを得てその場所に貢献することが出来る、そういうような社会構造、これがなければいけない。現状ではないけれども、いずれ職業と教育環境は外部化することが、Replace することが出来るだろう。そうすると個人はもっと自由になることが考えられる。これが外部化における機能の Replaceability?? ということです。

2. 権利の条件としての恒常性、連続性 (空間、時間、内容)

それから Habito というものが持っている、もう一つの重要な機能、これは基地としての機能、ベースとしての機能です。ベースというのは何かというと、そこに行くとき必ず必要なものが置いてあるわけです。登山をする時もベースキャンプを置いて行きます。そこまで戻れば食べ物もある、水もある、燃料もある、そういう場所としてベースを置いておくわけです。それに相当するものが、社会の中に点々といろいろな形で置かれていなければならぬ。そこへふらっと来て取り付いたとすると、自分に必要なものがそこで全部得ることが出来る。それが一つは Home の基本機能なわけです。勿論、自分が作って自分が住んでいるからですが、ある必要によってそこをあけて誰かが使うようになった場合、その次の人が使うことに足る機能というものが十分に具備されていなければいけない。その具備されているものが基地としての機能である。

それは存在の支援機能の恒常化、いわゆる空間的、時間的、内容的、いつでもある、どこにでもある、なんでもある、そういう恒常化です。これが人々の権利の実現度を考える時に、こういう外部機能がどの程度恒常化されているかということによって、人々の権利をはかってみることが出来る。それを考えると、日本の社会というのはこの外部機能がどこまで発達しているかということ、非常に貧困です。それも個人の汗水たらす??、例えば宅配屋とか、そういう個人が体を使いながらやっているものに非常に主に頼っている。そういう未熟な状態にあるわけですので、権利の実現度は実は低いと考えなければいけない。

それで先程言ったような意味での、任意の場所に移ったその場所から、そこに30年居たのと同じようにその場所を使うことが出来、その場所に貢献することが出来るような支援機能を持った空間でなければいけないというのは、そのような意味です。

これは何かと言うと、一番よく思いだされるのは、ホテルの「コンシエルジュ」の機能です。日本はあまり発達していませんけれども、欧米のホテルにいきますと必ず「コンシ

エルジュ」といのがいまして、ロビーに大きな机を置いて、あれは偉い人なんです。それでそこへ行って頼みますと、劇場に切符なり、レストランの予約なり、何がどこにあるだろうかということ、このホテルはどのように??たらいのかというようなこと、そういう情報を全部教えてくれる。場合によると、地域の歴史から、何から全部知っているわけです。

私はこのホテルの「コンシエルジュ」を非常に多用しております。まずホテルに行くと「コンシエルジュ」に用を頼みに行くのです。何回も何回も用を頼みに行くと、顔を憶えてくれるわけです。その次に行った時には、また来てくれたねと、向こうも喜んで更によりサービスをしてくれる。名前を憶えておくと、電話をかけて、明日ニューヨークに行くからどこかの切符をとっておいてくれというと、ちゃんととっておいてくれる。そういう「コンシエルジュ」の機能、ニューヨークに行ってもひとつも困らない、パリに行ってもひとつも困らないような機能、それが「コンシエルジュ」に代表されるわけですがけれども、そういう機能をもった社会メディアというものが必要になってくる。この社会メディアによって、Homeが初めて成立するのだということです。

このような機能は、やがて（後半で）本格的な社会制度となっていこう。制度になるとこれは自動的に動き始めます。一人一人が苦勞しなくても、制度が自動的に動き始めて、それが満たされない場合には罰を?することが出来るわけです。もし社会制度が可能になると、Habitaculum というものが拡散する要件を初めて持つことになるわけです。世界中どこにいても「コンシエルジュ」のようなものがいて、頼めば何でもしてくれる状態の空間が獲得出来れば、それは住まいが固定化していなくても、世界中どこにでもあることになる、住まいの拡散が可能になる。その要件がこれで初めて整うということなんです。

この外部機関を持つとどんな利点があるかと言いますと、利点と問題点があるわけですが、まず外部機関は一人一人に対応しますけれども、全体は大量の素材を処理するわけです。そうすると、そこを通過して社会に出ていくものの廃棄物というものは、全部そこで管理をすることが出来る。拡散する前に集中して管理をすることが出来るわけです。

これは非常に重要なことで、昔子供の時に私達は御飯粒をこぼしちゃいけない、それは大切なものなんだ、お百姓さんが毎日働いてやったもので、この日本中でこぼしている御飯粒を集めたら大変な量になるんだと、先生からも親からもよく聞かされたものなんです。ところがこぼした御飯粒というのは、利用価値があるかということ実際にはないんです。要するに各家に行って、落ちた御飯粒を集めて誰かが食べられるようにする人もいないし、そんなものを食べる人も絶対いないわけです。ただ御飯粒をこぼす前のところで、こぼすことを避けるような方法をとっておいて、それに相当する御飯の粒の数をプールしておくことが出来れば、これは相当な量ですから貧困者にあげることが出来るわけです。

その意味で外部機関というのは、すべての問題を集中処理することが出来るというので、今皆が考えているように、貸おむつをやってよくない、家庭が破壊するのではないかと考えているようなこととは全く正反対の意味での、社会的貢献度が非常に強いものである。それはむしろ持たなければいけないものだと考えておるわけですので、そこについてのご理解を得られればと思います。

非汚染的廃棄物処理というのは、今はまだ実際にはやっていなくて、分別收拾をやったものを結局どうやっているかということ、夢の島と一緒に捨てているとか、せつかく電池を別な袋に入れて集めておいても、それを電池として收拾してくれる機関がないものですから、結局燃えないゴミに入れてしまう。そうすると燃えるゴミと一緒に捨てられて埋められてしまう。そういう状態になっている、今はまだ全然やっていないわけですがそれでもそれが出来る。それで個別に廃棄、排出した拡散したものは絶対回収できない。

それは例えば、各家庭で石油を燃して出てきた二酸化炭素、窒素酸化物はどうやっても回収出来ないわけです。各家庭の石油ストーブに、例えば脱硫装置を付けたりすると、これは非常に高くてしょうがない。脱硫出来た硫黄なんかを買いに歩く人もいない。硫黄を結局捨てることになる。それで環境汚染になる。その意味で、各最終末端のところでは発生した廃棄物というのは、絶対にこれを集めることは出来ない、処理することは出来な

い。それを中心で集めることが出来る。

ただそうすると廃棄物の量が増えるわけです。その廃棄物の量というのは、例えばお魚を上手な奥さんがおろすのと、スーパーマーケットで魚をおろしてパッケージで売りに出す時のパーセンテージというのは、うまい人がやるとほんの数パーセント位で廃棄物がとまってしまいます。それが頭を??したり、骨はもう一度焼いてみたり、あらゆる意味で非常に低いパーセンテージになる。それがスーパーマーケットのような所では、頭も尻尾も切って、腸も全部捨ててしまう、そういうことが起こるので、廃棄物の量が増えるわけです。

量の増えたものを、これを集中的に管理をして再利用することが出来たら、これは寧ろ再生可能なリソースを増やしていくことになる。それでこの外部機関というものが、そのような意味でも非常に重要である。各家庭でやっている限り、環境汚染というものは絶対にとめることが出来ない。だけど外部機関を設けることによって、それを吸収することが可能になる。それで今はろくでもないけれど、ここに関わる技術開発はたくさんあるということです。

それから、権利の条件としてHabi???を考えてみますと、Habi???というのはある条件を持った空間、「皮膚空間」を所有すること、所有ということに今度は関係してくるわけです。

よい環境を所有するということが、これはまさに権利そのものなんですけれども、その権利の実現度というものが、やはりここではかってみよう。それはエア・コンディショニングのコンディショニング範囲が示唆する権利の実現形態と恒常性、コンディショニング・エンヴァイロメントがコンディショニングしている範囲がどれくらい大きいかということで、その空間における人の権利の大きさがわかるという考えをここに示しているわけです。

外国にしばらくお住みになった方がだいぶ多いと思うんですけれども、ヨーロッパにしるアメリカにしる、だいたいエア・コンディショニングというもの、暖房冷房というものは、外から見て建物の輪郭の中に入っているすべての部屋に対してエア・コンディショニングが行われています。スペースのコンディショニングが行われています。

それが日本の建築の中では必ずしもそうではなくて、一番たくさん住む部屋にはエアコンが入っているけれども、あんまり使わない部屋にはほとんど入っていない。台所にラジエーターがちゃんと備えられてある家が、この中で何パーセント位か。それからお風呂場にラジエーターがある家がだいたい何パーセントか。またすぐ外にある洗面所にラジエーターがある家が何パーセントか。それから玄関に空調装置がちゃんとある所、トイレに別に空調装置がある家、それを持っていない家が日本の場合非常に多い。それがやはり権利の大きさに違いということになって現われてくる。要するに、権利の概念の違いが、こういうところまで現われているとみるべきだと考えている。

旅館からホテル風の外観に変わった、日本式の、ちょっと見るとホテルのように見える旅館があります。それから欧米式のあのタイプのホスピタリティを持ったホテルがあります。これは外観はそんなに違わなく見える。入ったらフロントなんかがあったりするけれども、そのホテルに実際に泊まってみると非常に大きな差に気付くわけです。

例えばエア・コンディショニングでいうと、欧米の相当大きな部屋を借りたりしましても、部屋のあらゆる所にコンディショニングがいきわたっています。ですからドアを開けて入った後は、ほとんど裸で過ごしていてひとつも不快ではないわけです。それが日本の旅館からホテルになったタイプの旅館は、ドア開けた所はひとつも快適ではない。そこにトイレがあったり、お風呂場がくっついていたり、洗面所もそこにあたりする。次の間があったりして、次の間も決して快適ではない。一番奥の寝る部屋によく空調、ヒーターが入っている。それからその奥のサンルームのような所にも入っていない。こういうケースが非常に多いのです。私はろくな旅館に泊まってないからかもしれないけども、経験的にいうとそうなんです。その土地の人に聞いてみると、あの旅館は第一級駄よ、いい旅館だよという所に泊まってみると、やはりそうなんです。お風呂に入る時に、暖かい部屋から出てガタガタしながらお風呂に入る。それから温泉を自慢にしている旅館の場合、そこから出て温泉のある所に行く時に、廊下が外と同じ温度なんです。廊下に暖房している温泉旅

館は非常に少ない。そうすると、外と同じ温度の所を浴衣を来て行って、熱いお湯に入って、またそこから寒い所を通して自分の部屋に戻る。これは健康には非常に悪い。脳溢血が多いのは当たり前です。

これは何かというと権利の侵害ですね。先程言った、DNAが持っているところの権利の侵害に当たるわけで、そういう意味で日本という社会と欧米という社会では、権利の持っている価値基準、成立基準というもの、スレッショールドが相当に大きく違っている。我々の場合も、より高い基準に実現基準というものを上げないといけない。権利としてそれを上げないといけない。Homeもそのような意味で、同じように考えなければいけない。

それで「皮膚空間」拡大の権利というのは、各部屋にその場所で自由制御可能なエンヴァイロメント・コンディショナーがなければいけない。その意味でいうと、非常に多くのホテルは、その部屋の中で自由なコンディションが可能じゃないです。自分の好きな温度に合わせて、??? (テープ折り返し点) いけないということなのです。

それを都市という場所で考えると、都市というのは外部機関の集積で実際出来上がってしまっている。その都市の規模が大きいと、普通の所では成立しないような外部機関も成立させることが出来る。そのような意味で都市というものの一つの機能、スケールのメリットというものを考えてみる事が出来る。都市化をしなければいけないというのはこういうことなんです。東京のようにだっ広いだけの都市に、果たしてこのようなメリットがあるかというわりに疑問なのですけれども。都市化というのはそういう意味ではない。非常に集中してそれを行うことが出来るような、そういう場所として考えるべきだと思います。

これはパリの地下鉄です。エトワール???線と2本ありまして、そのうちの南の方を通っている地下鉄ですけれども、上を通っているわけです。それで私が昔、留学の時に非常に感心したのは、この部分が非常に驚いたわけです。これは鉄骨を組んで、その間をレンガでアーチで組んであるのです。あの長い長い鉄橋を、鋼鉄のはりの間をいちいちレンガでアーチを組んである。アーチというのはヨーロッパの伝統的な技術です。これが出来た時は20世紀の初頭ですから、その時に鉄の技術もあった、鉄筋コンクリートの技術もあった。それなのに、こういう所では非常に古い技術を使っている。ところがその時、20世紀の非常に初頭に出来たこれが、今だに使える状態にある。これは保存性が非常によいということです。保存性がいいということは壊して作り直さなくてもいいということだから、回復性に非常に大きく寄与します。その意味で、これは学生の時に非常に感心したものの一つです。

これだけではなくて、実際にパリにしる、ヨーロッパに古い街は、必ずこのアーチ構造のものが非常に多くなっているのです。このアーチ構造は力学的に、初期のものは不安定だったけれども、ある程度以下の時期のものといのは非常に安定性が強くて、例えばノートルダム寺院はだいたい11世紀頃に出来たわけだから、だいたい1000年近くたっているわけです。それからローマにあるバンテオンもアーチ構造です、それからラヴェンナ?にあるサン・ヴィターレ?寺院もアーチ構造で、中世の非常に初期に作られたものです。それがいまだにたっているわけです。

このように申し上げると皆さんが、法隆寺だって世界最古の木造建築ではないかと言われるわけなんです。日本に古い木造建築がたくさんあるじゃないかと言われるんですけども、法隆寺の場合どうやってあの外観を保っているかという、時々大修理をやるんです。その大修理というのは全部???をバラバラにしてしまって、腐った所は木を入れ替えて、また組み上げてもとの形にするわけです。姫路城も同じように、石垣までばらして組み上げたわけです。そういう意味で言うと、例えばパリのノートルダム寺院を上から石を全部一つずつ外して、手入れをして全部組み上げたという話はたぶん誰も聞いたことがないと思うのです。あれは1000年位前にたったまんまで保っているわけです。これはまさに保存性で言うと非常に高いです。その意味で、あれは今でも教会として実際に使われている、公共のようにたっている場所ですから、回復性への貢献というのは非常に非常に強い

ものがあります。

このように、回復性に対する能力の高い都市というものと、低い都市というものがやっぱりあるのだということ。これはロンドンの、ご覧になったことがあると思いますが、木のエスカレーターです。エスカレーターというのは、19世紀の末に出来上がったものですが、まさにこういうものだったわけです。ロンドンの地下鉄の大火があった時に、燃えたのはこれなんです。木だから燃えたのですけれども。これはパリの??という地下鉄の駅にあるわけなんです。これを見て、私が1957、8、9年頃に行って、あきれたんです。今だにこんなものを使っている、なんていう国だろうと思ってあきれたわけです。日本の方が鋼鉄の階段を作っている、遙かに進んでいるのではないかと浅薄にも信じたわけです。ところがその後パリに行ってみるとまだこれを使っているのです。今度行ってみたらまだ使っているのです。実際に役に立って、??、結構な早さでゴトゴトいいながら動いている。これはメンテナンスさえやれば充分にもつ状態で使われている。これは同じことを繰り返し繰り返し言うと、回復性への貢献度、やはり非常に高いものであるということなんです。

これはオルセー美術館、これは駅です。昔私が学生の時に、ここに?ループルがあるわけですがけれども、???チュールリ???, ここをよく車で通って、対岸にこれがあるので、なんて立派な建物だなと思っていたんです。そうしたらここはオルセー波止場という所なんですけれども、その上に立っているオルセー駅の建築物で、実は1957、8年から全然使っていない空き家だったんです。それをつい最近、内装を改築してオルセー美術館にして、???にあった印象派の絵を全部ここにもっていったわけです。このドームを利用して大空間を作って、大きな彫刻やなんか非常に小さく見えるような、こういう大空間を作った。この大空間を作るというのは、イギリスのクリスタル・パレスもそうですが、その歴史で言うところのローマのパンテオン、ギリシャの神殿のようなもの、ああいう大空間を作る技術というのは、ヨーロッパ社会での一つの方向性で、これは実はコンディションド・エンヴァイラメントを作っている。雨が降っても雪が降っても、??の人には何の影響も与えないで済んでいるという形で作られたものを、別の用途に生かしている。

これはオペラ座にある???, これは??天文台の傍にある建築、?????。?????。この壁面の部分は昔のままなのです。それだけの保存性をもっている。特に駅の??を残している部分、??ロータスのようなもの、これも非常に見事なものです。こういうアールの??のようなものを、うまく駅の構造の中にはめ込んで見せている。

これ??時計台ですね、これ有名で皆さんもよく話題にする時計ですがけれども、??燦然たる時計が出来上がった19世紀の末にすでにあって、長い間これが放置されてほこりをかぶって、もう一回使おうとすると今でも生き生きと使える状態になっている。全部昔のままです。ここに階層があって、人がたくさん歩いて、向こうには展示物がある、そういう構造を守っているのです。これがヨーロッパの底力の一つになっているわけです。

リソース難でこれはお見せするはずだったんだけど、これはビアリッツという場所の私立のカジノです。高級保養地です。先程言った、ニースもカンヌもこれと同じところにあたるわけです。これも中間集合がこれをやろうとすると、非常に汚くなって雰囲気がおちるといのでとても嫌うわけです。よく日本人の旅行者がヨーロッパの街へ行くと、食事をする時レストランなんかで別室に入られます。それは何でかと言うと、日本人がいると雰囲気が、悪く言うと下がるのです。ベチャベチャ喋って、同じようなのが皆かたまると、ああいうことはヨーロッパ人にはないから。皆一人一人、主体性をもって食べているところへ、突然わっと入ってきてベチャベチャで、出ていった後はチップもない、そういうことがあるので、実際に後から参入した成り上がり者には、こういう優雅な環境というものが持てない。それならどうしたらいいのかということで、Languedocの地域の開発が出来たというわけです。

3. 機能の恒常化から非決定性へ (IIIへの推移部)

住まいが即ち定住なのかということ、これは一般にそう思われているのです。住まいというものを設けると定住をするというように考えられて、それへの疑問です。この前、主食と副食という話題がありまして、主食として本拠を持って、副食として別荘やなんかを方々へ持とうではないかという話題がありました。

ただよく考えると、主食というのはあるんだろうかということなんです。日本の場合、かつて主食と言われたのはお米で、肉とか野菜とかいうのは副食だったんです。そういう意味で今でも米問題があるけれども、米は日本の魂だというような人がいるけれども、その意味で主食という言い方をするわけです。その意味で定着性のある住居を主食となぞらえるということがあるのだけれども、ヨーロッパへ行くとお米はもともと副食ですから、場所によって主食、副食の意味が全く変わってくる。それで澱粉質だけでお腹を一杯にするような食事というのは、欧米にはないわけです。そこで主食、副食の位置づけ、意味づけというのが相当変わってくる。それを考えてみようかということです。

それで主食も副食もなく、すべてが同じ価値を持った皿である、すべてが違ってそれぞれ味の違う同じ権利を持ったお皿である考えればいいわけです。ですから東京にある建物は本拠ではなくて東京にあるだけ、それから那須でもどこかにある建物は、別荘とか何かではなくて、そこにある建物と考えればいい。そこで機能の恒常化というもの考えた時に、その機能が恒常化していく時にどういう過程を経るかということ、装置化をしていくわけです。機能は初め行動で持つわけですがけれども、それが装置になって家の中に定着していく。

今度、装置化するとそれが制度化になる。例えば家の中にお風呂を作りますと、それが装置になります。そうすると、昔だったらば家長が一番最初に入って、身分が下がる順番で入って行って、最後に女中が入ってという、そういう序列があったわけです。

ただそういう制度化というのは、今度新しく変わっていく契機がある。それで制度化、装置化が出来るると自動化するわけですがけれども、そのような意味でのHabi??をその環境を所有しているということについて変化が起こり始めてくる。その過程を見てみよう。

????と書いてあるのは、パリの地下鉄にある自動扉で、ある年代以上前にパリを訪ねられた方は、これはご存じです。これがどんな代物化かというと、階段なりプラットホームへの入口があるんです。この人がこちらに入れないように檻が出来てるんです。それでこの扉は、地下鉄がプラットホームに入ってくるしばらく前に閉まってしまうんです。5~6cmの隙間があいてるくらいで閉まってしまう。この高さは、大人が上からのぞけるくらいの高さになっているんです。これは何のためにあるかということ、ある時間遅れて入って来た人は、駆け込み乗車をしないように止めちゃうということなんです。日本の場合は、駆け込み乗車はおやめ下さいと盛んに言います。あれはうるさい上に無駄です。それを、こういうものを作ってしまうと、駆け込み乗車なんかは起こるはずがないわけなんです。これが制度化、装置化であり、すなわち制度なんです。遅れてきた人は入ってはいけないという制度なんです。音楽会も始まってから来た人は外で待ってなければいけない。それはまさにこのプロトコルです。この社会的なプロトコルが実在しているわけなんです。

ところが、この自動扉は今もう使っていないのです。動いていないんです。取り外しているところがたくさんあるんです。（前に撮りに行った時にうっかり忘れて、もう全部無くなったかと方々探してましたら、ようやくとあってほっとしたんですけども。）書いてある字は何十年も前に書いた字です。これは昔のままで、来た人が端に手をつくのです。最後に閉まる瞬間の時はそこを押して入るわけです。それでも駄目な人は向こうでおとなしく待っている。このプロトコルというのは、郵便局で列を作っても、前の人が時間がかかっても黙って待っている。いくら時間がかかっても、自分の権利と同じ権利として認めて黙って待っている。そういうプロトコルに通じています。それが最近日本でもやっているように、一列になって窓口が開いたところに自由に行く完全な、いわば民主的な、平等な行列でものが出来るようになった。それの以前のプロトコルです。

それが今は使われていないんですけども、何で使われなくなったかと言うと、人が多すぎてこれを一々止めていることが出来なくなってしまったわけです。そこでとられたのが、次のソリューションで、待たないで次が来れば誰も急がないということなんです。よ

く銀座線の地下鉄が行ってしまうというので、慌てて駆ける人は田舎者だということが言われますけれども、あれも2分か3分すると次が来ちゃうわけです。それでその時間というのは、プラットホームの端から端まで歩くよりも短い時間です。だから後ろから前へ歩いているうちに次の車両が入ってきてしまうわけです。それくらいに待たないでいるんだっただらば、誰も駆けだしたりしなくなるんだ。金持ち喧嘩せずみたいなところがある。そうすると、媒質というのは連続的になって、決定的な形態でなく、非決定的な形態をとることが出来る。どの車両も自由に選ぶことが出来るという非決定な状態になる。その必ず？にされるものは、大事に持って歩かなくても、旅行するときに大きな鞆を持って歩くことが段々少なくなってきた。それはホテルなり、どこかに行けば、さっきの Replaceable? な機能を持ったものがいつでも提供される、どこでも提供されることがわかっているから持っていくものが減ったわけです。そうすると決定的に所有をしなくても社会の中で生きていくことが出来る状態になる。それが非決定性への移行の証明なわけで、これが III の一つのテーマになっていくわけです。

それでこの場合の権利の条件というのは、間欠性、間が空いている量子？、単位が、常に必要程度に小さければそれ以上のことは人は望まないということです。いろいろな例を思い付くと思いますが、これは時間がないので、思い付いた例を考えて下さい。

III. 様態 (マルチハビテーションの視点)

ここで大事なものは、人間が生存するために必要な諸機能と非決定的に対応するということです。これは決定的に対応するというのは、必要なものは全部ここに並べられていて、それをある時間になったら使うという、その契約が成り立って、全てを買って自分の周りに並べておくということ、そういう意味の恒常性があったわけですが、非決定的恒常性というのはそういうことではなくて、望んだ時にいつでもそのものが手に入るようになるという状態です。それで望まない時はなくてもいっこうに構わない。望んだ時にさっと手に入ればいいわけです。落語に出てくるおかみさんの話なのだけれども、非常によく気がつく人がいて、自分の家はこうだと亭主の自慢をするわけです。食事をしようとして、食べ物を見るとおかみさんがつまんで口の中に入れてくれる。ある時ついに見るものがなくなって、火鉢の炭火を見たら、それがぱっと口の中に入ってきたというおかみさんがいるんですけれども、それは亭主の前に全部並んでいなくても、そういうサービス機能があれば必要なものは全部口に入ってくるという機能です。それが非決定的な恒常性ということになるわけです。

非決定的な恒常性は、メディア・コンパウンド、メディア・アマルガメーションという形で表現出来るだろう。メディア・コンパウンドというのは、メディア・ミックスではない、メディア・ミックスではただ混ぜただけだけれども、コンパウンドになっている。それからアマルガムになっている、合金になっている。その意味で、バラバラに寄せ集めたのではなくて、合金としての新しい機能を持っている形態をとっていくことになるだろう。それがマルチ・ハビテーションの要件になるだろうということです。

1. 非決定的な恒常性

それで非決定な恒常性というのは、ポテンシャルのある媒質。媒質というのは何物かが必要だった時にその形をとるようなもの。音のエネルギーが加わると音になってくれる、それが音の媒質としての空気です。その中で条件のある時だけ存在していただければよいのだということです。ですから音が必要な時、音のエネルギーを与えるとそれが空気を伝わってなくなってしまう、何も音が聞こえなくなる。これは決定的な存在ではなくて、非決定的な存在です。よく私が例にあげるのは「きんとん雲」のようなものは非決定的な存在、要するに乗りたいたいと思って呪文を唱えて紙を投げると、一陣の風とともに「きんとん雲」がやってきてのっけてくれる、それで行きたいところへ行ったら、降りるとそれがな

くなってくれる。これはまさに機能として決定的な存在をしているのではない。非決定的な恒常性がある。欲しいといったらすぐやってくれる。

それが実は無常なのであって、その無常をうまく説いたのが老子という人で、ここに「道可道非常道?」と書いてありますが、これは日本語に訳されると「道の道たるべきは常の道にあらず」です。これは漢字の害の時にあげる例なんですけれども。「道の道たるべきは常の道にあらず」というのは、老子のいう道（タオ）というの、常というのはいつでも存在している道（タオ）ではないのだ。常とはいつでもあるということ。無常というのはいつでもあるのではないということ。無常感というの、今まで生きた人がいなくなってしまう、それはいつでもあるのではなかったのだなと気がつくこと、それが無常感です。「大平記」の中にでてくる無常感というの、実はそういうものです。「常の道にあらず」というのは、いつでも存在している道（タオ）じゃない。道（タオ）というの、何かと言うと、まさに媒質で、自分が必要とした時にそのものの形をとってくれるもの、必要でなくなった時には宇宙にかえってなくなってしまうもの、それが道（タオ）です。

老子というの、2500年位前にいた人なんです、ちょうどその頃、ギリシャにヘラクレイトスという人がいて、非決定的な哲学を述べていたのです。万物は流転する、すべて物はかわっていくんだ、という言い方をしている、やはり同じ頃、中国にもこういう哲学者がいて、非常に立派な哲学を述べていた。これが現代物理学とまさに同じことを言っているわけです。媒質と存在という関係です。

鴨長明の「方丈記」もやはり同じことで、「行く川の流れは」はよくよく引用される言葉で、ここはあまり覚えておられないかもしれませんが、「世の中にある人とすみかと、またかくのごとし」。これは卓見です。1212年にまさにこれを言ったわけです。世の中にある人は決して定住なんかしているのではない。人はいつもいるのではない、定住なんかしているのではない、いつでも動いている。それが当然のことなんだと彼は言っているのです。それで実際によく考えると、人は決して定住なんかしてなくて、一生同じところに住んでいる人は非常に少ない。実は非常に動いているのに、定住していると思っているのです。これは非常に大きな誤解で、鴨長明のいう通りなんです。

2. 定住の拡大としてのMulti Habitation

そうするとハビテーションというものを考える時には、こういう???を考えなければいけない。それでいつでも変わっている Home、いつでも動いている Home というのを考えなければいけない。そうするとどんな格好になるんだということ、2. に書いてある Multi Habitation 定住の拡大ということになるわけです。これは定住が増えるのではなくて、???が拡大する。領域も拡大するということです。ここに書いてある、???というの、神の偏在、神はあまねくあらゆるところにいるという考えです。それでキリスト教の人達が、聖書を見ながら神を心に思い浮かべた時に、その神はどこにでもいるのだ、その人のところにいるのだ。それから他の人のところにもいるのだ。神は偏在、あまねく存在しているのだという考え方です。それによって、悪いことをしたら必ず見られているということがあるわけなのです。

それで神の偏在を今度、???というふう言い換える。これは人間の偏在。人間というの、あらゆるところにいることができるものだというふう言い換えようというわけです。それは何かと言うと、非決定的な定住ということになり、それは量子論的な定住ということになるのだということなんです。この場合の量子論というのとはとても単純なことで、一個の電子を観察しますと、その電子が次のある時間に観察されるのは、この電子の運動の最大径の円の必ず内側にある。どこにいるか分からないけれども、その中に確率的にあらゆる場所にいるというのが量子論の考えです。それから穴が2つあった時に、1個の電子がこちらから行って、結果としてこっちに到達した。そうするとその電子を実際に観察しなかった場合には、どっちを通ったのか分からないわけです。その時に量子論でいうのは、この電子は両方の穴を同じ確率で通っているのだということです。そうすると文句言われる筋あいは全然ない。それでその時の電子の状態は、両側にまたがった雲のよう

な状態で、この2つの穴を越えてくるんだというわけなんです。それで電子の場合も、最初一回観察しました。次の観察は、観察するまではどこにいるか分からないです。観察するとどこかにみつかるわけです。そうするその次の位置というのは、その最大径を中心にした円の中にある、いつでもそういうふうに動いていくわけです。

そのような意味で、非決定な人間の量子論的な存在の仕方というのはいかなるかということで、人間にとっては地球上すべてが人間の個の基地として考えることが出来る。地球そのものが基地と考える。今基地は狭いところにあるような機能があるものをベースとして考えているけれども、そうじゃなくて地球全体を基地として考えてしまうと、非常に楽になるわけです。その意味で個人は地球上のあらゆる場所に確率的に存在し、その場所を使い、その場所に貢献する。そのような意味の社会メディアとハビテーションを考えるとということです。

皆さんもアメリカやヨーロッパに行って帰ってきて、そうするといない時もある。ここを観察するわけです。そうすると確率的に今平均何人の人がここにいる、この委員会は平均何人の委員会なのかという言い方が出来るわけです。次に観察すると、誰か欠けている。すると確率的にその人がいなかったことが初めて分かるわけです。

そのようにして人間というのは、長谷川さんや皆さんのように、至る所、世界中を歩き回っている人の例をとってみると、地球上のあらゆる場所に量子論的に、確率的に存在しているんだという印象が非常に強いのです。

その意味から逆に考えると、社会メディアというのはやる事がたくさん出てくる、ソリューションがたくさん出てくるわけです。それで人間の種としての特徴を考えると、とても面白い種なんですけれども、常に何十万の個体が空中に存在しているんです。どこからか地球の上にいる人類というのを分析する人がどこかの星からやってきます。そうすると地面の上にも確かに人はいる。だけどそれと別にいつでも飛行機の中にはたくさんの人がいつでもいるではないか。最初に飛んだのは1903年、ちょっと飛んだだけだけでも、それ以後だんだん飛ぶ人が増えてきて、夜間飛行もあれば昼間飛行もあるというので、世界中で非常にたくさんの方が空中にいる種なんです。

その意味でいうと非常に不確定な存在なんです。定住は、外から観察した時に飛行機に乗っている人の定住なんていうのは考えられないわけです。いつでも移動しているわけだから。早く移動する時には、この動物は上に行ってしまうんだという解釈をする、それは正しいわけです。その非決定の人類全体というのに対応して、地球社会の媒質としての環境を考えようということ、これが実はマルチ・ハビテーションの本質なんではないかということなんです。

そこから、これは勿論抽象的な話だけれども、後はどうやってブレイクダウンして、具体的な建物とか社会施設に落とすかというのは次の問題です。ただ、こういう観点からまず人間をつかまえて、その対応するハビテーションを考えてみよう。

3. メディア・コンパウンド、メディア・アマルガメーション

その出来上がる様態は、メディア・コンパウンド、メディア・アマルガメーションの権利に対応した非決定的な実現という形で起こるだろう。その人類全体の要求というのは多様だけれども、一人ずつの要求をとってみると、たった一人分しかない。これに一つずつ対応していけば全部に対応できるのだという考えです。

それはどういうことによっているかということ、DNAというのは各人唯一で、全てが違う。各人固有のもので全てが違う。その権利に対応するということは、各人個別に対応しなければこれは出来ないのだということ。これは教育を考えると、一律教育が駄目で、個別教育でなければいけない。そのために教師が足りない。そうしたらコンピュータでもってそれを処理していこうということ。これが一つの帰結として、こういうところから出てくるわけです。

それで現代のメディアの特性というのは、全体は大量化でありながら、個の個別化の並行にメディアは対応しているのだということ。例えば銀行のキャッシュ・ディスペンサー

というものは、使う人は非常に多いけれども、実際に一人一人に対応して出てくるお金といのは一人一人全部別です。それからその時銀行が管理している口座の中身というのも全部別です。例えば一億円を預けてあって、それで一万円出した。十万円しか入ってなくて十万円出した。一万円しか入ってなくて一万円出した。これは出した数としては似ているけれども、そのバックグラウンドは違うわけです。ただ違うバックグラウンドにそれぞれに全て個別に対応することが可能になる、それが現代のメディアの特性です。

そこでハビテーションを考えてみると、ハビテーションというのは、任意の場所で任意のアマルガムを任意の目的において持つという人々、個の固有の権利の対応から考えてみる。そしてそれぞれの必要に対応した異なった機能のアマルガムを、地球のあらゆるところに確率的に持って、それによってその場所のクリエイティビティとプロダクティビティに貢献をするのだ。ただもらうだけではいけなくて、行ったらばそこに貢献をするのが必要なんです。ただ今の観光客にしる何にしる、行ったら貧るだけです。たいしたことないお金が落ちるだけ。ごく儲かるのは旅行社とか、そういうところしか儲からない。その意味でその地域にきちんと貢献しなければいけない。そういうような基地を持つことができるだろうか。これに今現時点で最も近い形、これはホテル・コンパウンドと呼ばれるところの形態だと考えられます。

ボストンにコプリ・センターというのがあります。あそこは池袋のサンシャインと若干似ているのです。構成も大きさも若干似ているのですけれども、あの機能は格段に違います。サンシャインは非常に使いにくい空間です。ただコプリ・プレイスは快適な非常に使いやすい空間になっています。道路も非常に広いです。

サンシャイン・ビルを作る時に相談を受けたんですが、12メートル道路をビルの中に作りたいというので、ただ道路の使い方をよく考えてくれないと今までのと同じになってしまうのだから、とよくよく言ったけれども、結局はそこにエスカレーターやいろんな物を置いて狭い道路と同じになって、あれが非常に広い道路が建築物の中にあると実感する人はほとんどいなくなってしまった。そういう失敗作です。

それに比べるとコプリ・センターは非常にゆったりとして、潇洒なたたずまいで、買う人の権利を十分に尊重しているという実感が非常にあります。これからのマルチ・ハビテーションを含む社会施設というのは、こういうものでなければいけません。

これはロスの??チャー・ホテルです。これは外観が特別だから有名ですけども、実はこれが何かというと、ホテル・コンパウンドの非常に原初的な形態を持っているわけです。ここには宿泊施設があり、それからブティックがたくさんあり、それから一階のロビーには相当広いいろいろなタイプの休むところとか、要するに南ヨーロッパの広場にあるテラスのような感じですよ。パリにもテラスがありますけれども、テラス風なものがコンディションドされたエンヴァイロメントの中に点々とある。その中が非常に快適に保たれている。そしてレセプションとかフロントデスクとかいうカウンターがあるところであって、そこに行けば何でも言うことはやってくれる。それから更にコンシェルジュがいて、別な意味で頼むことはすべてやってくれる。そういう形での、人が存在するための機能というのを相当充分にここは持っているわけです。例えば食料の生産機能というのは持っていないけれども、人がものを食べる空間、買う空間、自由に休める空間、誰にも文句を言わずに休んでいることが出来る、人を見物しながらゆっくり楽しむことが出来る。まさにテラスの機能です。

これはシカゴの??・ハイアットです。ただハイアット・リージェンシー・ホテルというのはみんなポートマンが作った大空間が中にある。それが外側仕立になっているという特徴を持っているんですが、これもやはり同じように広場が持っていた機能をそっくりそのまま持ち込んでいる。それは中世の広場が真ん中に水汲み場があり、それから石畳の広場があり、教会があり市役所がある。そのような機能が全部露出している空間、それが広場なんです。その市民生活に??いる機能が露出している空間が広場だとすれば、これはまさに広場と呼んでいい、広場をプライベートな商業空間に取り込んだ形態だと考えることが出来る。それでホテル・コンパウンドへの方向性というものを示している。

これはデファンスの??という建物ですけれども、これはいつ出来たかという、非常に新しいきれいな建物に見えるけれども、1958年に出来たのです。これがデファンスで一番最初に出来た建物だったのです。この開場式に偶然私が招かれて、皇太子と間違われて結構いいところへいたりして、この開場式をつぶさに見たんですけれども、このところには列国の女王様とか、??紳士、淑女は全部出席したんです。その時、ここは全部泥だらけだったんです。乗っていった車も泥んこのところに駐車して、歩いて入っていったんですけれども。式典が終わると皆出てきて、何とか様のお車という泥だらけのベンツやロールロイスが走っていったのです。なぜここが泥んこのかという疑問を持ちまして、フランスのある高官に聞いたら、ここにデファンス計画というのが始まって、そのためのインフラストラクチャーの整備を今やっているところだ、この??だけ最初に出来たのだという話なのです。

それでデファンスというのは非常に歴史の長い地域開発なんですけれども、こういう非常に大きな人工地盤を持っていて、この下は伽藍堂でもって、そこに人が下に入っていける、いづれのビルにでも自由に行けるところの連結空間があるわけなんです。それが備えられていて、つまりすべてのビルは一体になっている、非常に大きなエンヴァイラメントになっているわけです。それがデファンスの非常に重要な点なんです。

よくそこを理解しない人は、デファンスというのは高層ビルが立ち並んでいるだけじゃないか、新宿の副都心と同じじゃないかと言う人がよくいるんですけれども、それが全然違って、新宿の副都心というのは??水場の後を平にしてビルをさしていったようなものです。その下にソケットになるものがあるって、その下が全部つながっているわけでは全然ない。だからその建物から別の建物へ行く時は、雨の時は傘をさして、冬は風に吹かれて行かなければいけない。ところが??は、セーター一枚、Yシャツ一枚でどこへでも行くことが出来るわけです。これがコンディションド・エンヴァイラメントであり、人が住む、存在することの出来る環境の一つの典型的なソリューションだろうと思います。

それで??と??というのはいたい100年前に出来たフランスの誇りなんです。これと晴海にある展示センターと比べてみると、人間を入れる時のホスピタリティー、人を呼び込んで向かい入れるという意識において全く違っているということがわかります。

それでマルチ・ハビテーションの場合に、人を喜んで向かい入れる、アクエアス?というものがどの程度持つことが出来るだろうか、ということが非常に大きな条件になってくる。今世界中からいろんな人が来た時に、平気な顔して自分の家に向かい入れてもてなしをして帰ってもらうことの出来る、それも自分で引け目を感じないで出来る人は日本の場合は非常に少ないです。それは意識として、この違いなんです。空間に対する意識の違いというものが結果としてそうなったのです。安上がりですませるところは安上がりですましちゃうという社会貧困さというものがここに出ているわけです。

それからデファンスから地下鉄に入りまして、RERという高速電車に入って出て来ますと、シャトレという駅に出ます。面白いドアだと写真を撮っていましたが、2人の男が近づいてくるんです。地下鉄の中では写真を撮ってはいけないことになっている、そういう法律があるんだというのです。今は警告にとどめておくと言うのです。理由がよく分からないのです。ただ地下鉄の中に人々がいて、その写真を撮ったらプライバシーの侵害になる可能性がある、狭いところだから。そういう意味かもしれない。それから運転手にストロボをたいたら危険かもしれない。理由はよく分からないのですが、そういうことを言われてしまったんです。怒られて外に出たところが、??というレストランです。そのすぐ隣がご存じのレ・アルの再開発。これは三階建てになっていて地面まで光が入る。それでここに人々が集まって、大道芸人がいて、要するに広場の機能がここで再び持たれている。今、ヨーロッパの各都市の、中世から残っている各都市の広場がどうなっているかという、潜水を真ん中にして両側を車が通っていくだけの場所になっていて、こういう場所がなくなってしまったのです。コンコルド広場というのは非常に広いけれども、あれは単なる自動車の通路です。エトワール広場、シャルル・ド・ゴール広場、あそこで皆が集まって遊んでいるかという決してそうではなくて、車が単にグルグル回っている??

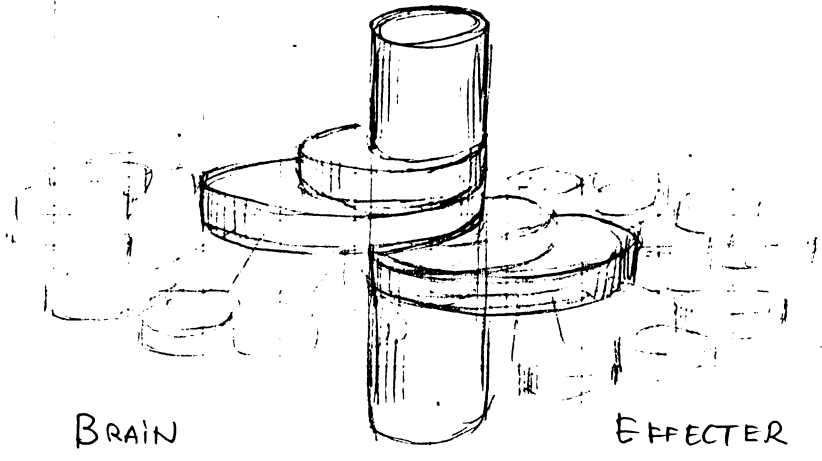
所出あるだけなんです。そういう意味の広場は、これからはコンディションド・エンヴァイラメントの中に持たなければいけない。これはマルチ・ハビテーションの中の一つの非常に大きな機能になってくるわけです。

これは市場です。レ・アルです。これは昔の地図ですので、今の地図はここが変わっているわけです。だから今この地図を買おうと思っても買えないわけです。相当貴重な地図にすでになってしまっている。これが証券取引所です。ここに穴をあけて三層にして、このところにポンピドーセンターを作ったのです。ここからここまでを再開発地域として作って、この間のいろいろな???も相当手が加えられています。古い古いパリの一区ですから、パリの一番最初に出来たところなんですけれども、その中の伝統的な場所を壊してしまっ、最も新しい???を作ったのです。その中に何があるかという、???というのがあります。これは蠟人形で有名な、おのぼりさんの行く博物館です。そこがこの中の一つのスペースを持ちまして、それでファッションの歴史という出し物を見せているわけです。その非常に新しいレ・アールの囲まれた空間の向こう側は、???教会といって12~3世紀頃の教会です。要するに非常に古いものと最も新しいものが平気な顔して同居している、それがパリの非常にいいところです。そしてレ・アールの一部にはこういうジムナスティックがありまして、ガラス戸があつてのぞくと中にある人が???してる。???というのは温水プールです。ここで人々が楽しんでいる場所がさっきのようなところにある。要するにメディア・コンパウンドです。まさにメディア・アマルガメーションが出来ている。ここは有名なクストーの管理しているところの海洋の博物館が、ここから入るとある。それもこの中にある。???もある。こういうのもある。ジムナスティックもある。本を買ったりレコードを買ったりする???という非常に大きな、丸善よりはるかに大きな本屋がある。世界中の民族音楽のレコードはあそこでわけなく手にはいる。そういうところがこの中に全部入っている。まさに繰り返しいうメディア・コンパウンドを作っているわけです。

そのメディア・コンパウンドを、これから我々がマルチ・ハビテーションの視点で考えた時にどんなふう考えたらいいかというので、これは1974年ですけれども、私達が研究会で行ったインフォーラムという研究なんですけれども、これは広尾の一带なんです。これが聖心、日赤、そういう機能は全部そのまま取り入れてしまおう、教育も病院も取り入れてしまおう、???町辺りにある商店街を全部入れたショッピングセンター、ここに20階建て以上のこういうハビテーションを作りますと、ここで???いる数万の人全部吸収して、非常に広い家屋、200平米に近い一軒を持つことが、???が出来ると、そういう地域開発としてシミュレーションをやったものです。ここがインフォーラムの中心地で、ここにいろいろな情報がわきだしてくるようにある、欲しいものがここに来れば何でもとれる。それからここと全ての家庭は光ファイバーで結ばれていて、これは交通の幹線道路であると同時に光ファイバーの幹線道路で、他の地域のセンターともつながっているのです。ここには超大型のコンピュータがいくつあつて、この地域の情報は全部管理している。他にもこれはあつて、他のセンターにアクセスをすると、その???各家のモニターに???することが出来る。そういう新しい地域開発として、今考えるとマルチ・ハビテーションの一つの形態を予告したということになります。これは別な位置です。これは下水処理場で、これを持ってきてちゅうすい?にするわけです。それでまた全部使うわけです。???。この地域内は自動車が走ることは禁止されていて、地域内交通機関というのは全部建物の内側に入っていて、あらゆる???内側に交通機関が入っているわけです。だから濡れなくてもどこにでも行けるという設計で、特に情報の部分が非常に???を???。これはまた別な視点から見たものですが、若干デファンスと似たような形です。ここにあるようなスポーツとか劇場のようなものを集めた一つの塔、それからハビテーションの機能、これはアメニティ、これは穴があいて下まで光が入るようになっている。ここも穴があいて下まで。道路、鉄道は地下に入っているわけです。ここには何万台も入る地下駐車場があつて、ここで内側のトランスポーターション、乗り移るわけです。むこう側はワークのエリアになっていて、ビジネスをやってもいいし芸術をやってもいい。ビルの格好はどんな形をしていてもかまわないのですが、ただちょっと離れていて近いところ、だいたい1

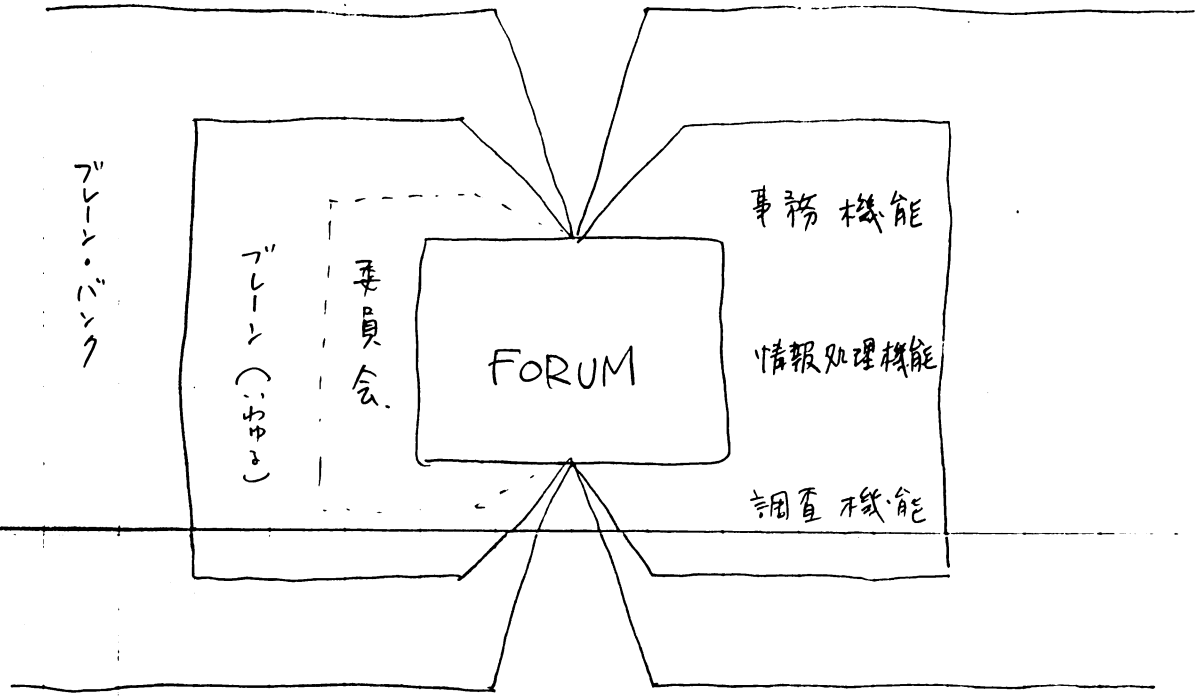
キロか何かで歩いてても疲れない程度の距離にこれがあるわけです。ワーク・エリアから見たもので、はるか向こうに、西かどこかに、雲がたなびいているところに、見るからに心地よさそうな自分の住居があるのを見ながらここで働く。だからお昼御飯を帰って食べてもいっこうに構わないわけです。これは他のこのような地下と連結していて、ここで十万単位の人を一つの都市として包容することが出来て、本当は望むらくはそれ以外のところは全部野原にしてしまいたい。東京が一面の野原で、その中に??なこういう環境がある。ちょっと遠くを見るとまた同じような、似たような形の違うものがある、そこは非常に高速なトランスポートで結ばれている。情報も高速情報網でつながれている。これが日本中にこう出来ていって、更に世界中の重要な機関と結んでいるという構想です。この一番上の層、ここはちょっと厚くなっていて、ここに電気、電話、瓦斯、水道、下水というような全てのインフラストラクチャーがここに入って、非常に管理のしやすいようになっている。それ以外のところは、あらゆる???に対応して使うことが出来る場所になっている。こんなようなものが、将来のマルチ・ハビテーションの一つの条件を満たすものとしてなってくるのではないか。それでよくマルチ・ハビテーションというと、1戸建ての別荘のようなものをまず考えるけれども、この中で十分に広さと眺望を得た??、この中のハビテーションというのは非常に快適です。それで高いところで遠くを見るというのは気持ちのいいものですから、人によって低いところが好きな人は低いところに、高いところが好きな人は高いところに住んで、そのような形での非常に快適な空間、これを快適であり尚且つ人間が存在するに足りる全ての機能を具備したこういう空間を作っている。これがまさにマルチ・ハビテーションであり、これを小型化してコンパクトなものを作って???、これも可能です。更に更に大きくして、一つの巨大な何十万という、東京に比べると巨大ではないけれども、大きな百万位までの都市をこれでカバーすることが出来る。そういう構想です。その中でマルチ・ハビテーションを考えたら、あと具体的にどうなるかなというのを一緒に考えなければ??。

(以上)



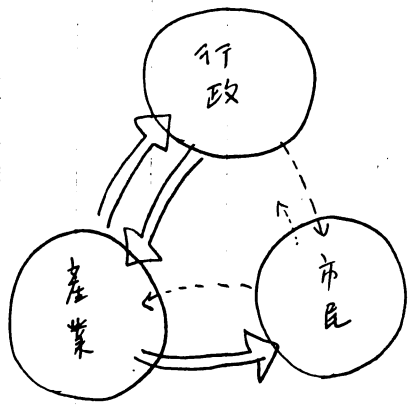
BRAIN

EFFECTER



活動計画

- 研究計画
- PR計画
- 展示計画
- 年度テーマ
- キャンベイン
- 各種プロジェクト



FORUMの接触機能

